



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言
Author(s)	青井, 俊樹
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 1
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91567
Type	other
File Information	kantougen.pdf



巻 頭 言

青 井 俊 樹

1970年（昭和45年）の春、農学部4階の薄汚れた部屋で北大ヒグマ研究グループはその産声をあげた。文献もなく専門の知識もなく、調査方法はおろかどこへ行けばヒグマの調査ができるかもわからないまったく零からのスタートであった。ただあったのは、せっきく北海道に着いた（居る）のだからとにかく野生のヒグマという動物をこの目で見てみたいというきわめて素朴な願望と、知られざるものに肉薄して少しでもその謎を解き明かしてみたいという真摯な知的欲求であった。無論調査資金もなければ1台の車もなく、まさに足でかせぐのが唯一の手段という時代が何年も続いた。それが、時は移り、今では航空機の利用さえ現実のものとなりつつある。ヒグマ研発足後約半年後に足をつっこんで、爾来十数年ヒグマ研と共に歩んで来た小生にとってまさしくそれは隔世の感ありである。その十数年の集大成とも言うべきイベントの一つが今回の第7回国際クマ会議への参加、発表という形となって実現したといえる。発表内容は必ずしも十数年間の研究の集大成ではなく、もっと今日的なものの、あるいはかなり個別的なものであったかも知れない。しかしそれは、発表者が自らの努力のみによって、ある日突然作り上げたものではない。1982年に発刊にこぎつけた「エゾヒグマ」もそうであったが、発足以来実に100名になんなんとする先人達が大なり小なり作り上げていったヒグマ研の歴史のはてに、初めて今回の渡米発表があり得たことを我々ヒグマ研の歴史の最新部に生きる者は胆に銘じなくてはなるまい。そして今回の国際交流で得たさまざまな最新情報、知識、人的交流、そして身に受けた奮い立つような刺激と興奮を仲間に伝え、共に燃え立ち、次なる大きな飛躍のステップにしていかなければならない。そうすることが、われわれの周囲に常に居てくれる多くの人々に対する真の還元であり、また今回後援して下さった方々への真なる御礼であると考え。したがってこの一遍の報告書をもってすべてこと足りたとはもちろん思っていない。

本報告書は以上のような我々の決意をも意味する一つの挨拶状と思ってページを開いていただければ幸いです。発表の内容自体、先進の研究に較べれば、まさしく較べるべくもありませんが、次にこの様な報告書をお送り出来るときには、各国から熱い支持を得られたと最後につけ加えられるものにしたいと思う次第であります。ご声援に対し衷心より御礼申し上げます。

1986年リラ冷えの5月記す